TURN NOTE

TURNにふれたときの言葉
2017

ARTS
COUNCIL
TOKYO

文化
オリンピアード

TOKYO 2020

TOKYO 2020
PARALYMPIC GAMES

Tokyo Tokyo
FESTIVAL

TURN NOTE

TURNにふれたときの言葉
2017

はじめに

「言葉」とは、私たちの感情や思想が、その社会で認められた意味としてまとまりを持ち、音声や文字によって表現されたものだという※。日常生活を送るうえで当たり前のように交わされる会話は意味が伝わりあっているからこそであるが、同時に、ひとたび慣れ親しんだ場所を離れると、口にする言葉が急にぎこちなく感じられたり、実際に伝わらなかったりという経験もする。「その社会」は、国や地域による物理的なものだけでなく、属する分野だったり、もっと小さな単位でも存在している。

TURN NOTE は、TURN がある新しい社会をつくり出すことを目指すにあたり、異なる背景を持つ様々な人たちが関わりあうための手立てとなりうる言葉を集め、記録し、共有していこうとする試みである。
２冊目の発行となる本書では、この一年に起こったすべてのイベント、日報、メールのやり取りなどを読み直し、聴き直し、その言葉の数々を集めた。本書に収録した言葉は、実際に受け取ったものや、同じ空間に居合せ共有しているものもあるが、立ち会っていない場面で交わされたやり取りからも引用した。さらに各ページには、引用した言葉が発せられた状況をより想像できるようにと、説明文を添えた。

※ 参考：三省堂大辞林

本書のサブタイトルは、１年目は「TURN を考えたときの言葉」であった。２年目となる今回は、「TURN にふれたときの言葉」とした。集まった言葉からは、主観的な思考に留まらず、自分という存在とは別の“何か”に触れた、その接点によって生まれた気持ちや考えにもとづいているような印象を得たからである。
私は、言葉の一つ一つに目を通し、元となった素材を読み直し、そこに添える言葉を探すという一連の編集作業を繰り返す中で、この一年の TURN を巡る言葉を介した経験の蓄積を知り、多くの関与者によって TURN が少しずつ形づくられようとしている事実に触れることができた。
もちろん、掲載した言葉以外に無数のやり取りがあったことは言うまでもなく、その中には、慎重な態度を内に秘めていると感じさせたり、言葉に表し難い状況を目の当たりにしたり、あるいは言葉を持たない人たちの存在があったことについても意識を馳せておきたい。そうして表された「言葉」の奥に存在する事実の一つ一つや、世界の一つ一つへの想像力を携え、多様な人の多様な言葉を得ながら、TURN というアクションが、より豊かな展開の広がりを示しはじめていることを感じた。

TURNコーディネーター
奥山理子
2018年2月

TURNについて

SOCIALLY INCLUSIVE ART PROJECT

T U R N

障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの属性や背景の違いを超えた多様な人々の出会いと表現を生み出すアートプロジェクト。
アーティストが、福祉施設や社会的支援を必要とする人のコミュニティへ赴き交流を重ねる「交流プログラム」、TURNの活動が日常的に実践される場をつくり出す「TURN LAND」、TURNを客観的な見地から考察する「TURN LAB」、そして各地のTURNが一堂に会すイベント「TURNフェス」の4つのプログラムをとおして、“その人らしさ”を尊重できる関係性のある豊かな社会の創造を目指し、国内外の協力者とともに展開している。

監修：日比野克彦（アーティスト、東京藝術大学美術学部長・美術学部先端芸術表現科教授）
プロジェクトディレクター：森司（アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長）
コーディネーター：奥山理子（アーツカウンシル東京／みずのき美術館キュレーター）
主催：東京都、アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
特定非営利活動法人 Art's Embrace

TURN 2017

2017年 1月　「TURN」の交流を見る、聞く、語る 中間報告会開催
全プロジェクトメンバーが集まり、
TURN フェス２に向けたプレゼンテーションを実施

3月　TURNフェス２開催
「多様な人と出会い、つながる」をテーマに、
交流プログラムをもとにした作品やパフォーマンスが会場に集結

5月　「NO LIMITS SPECIAL 2017 上野」に参加
パラリンピック競技の魅力を体感できる国内最大規模のイベントの
PR ブースに参加し、体験型の特別プログラムを実施

6月　第１回 TURNミーティング開催
TURN プロジェクトメンバーが一堂に会し、今年度の
キックオフイベントを実施

8月　TURNウェブサイトリニューアルオープン
TURNのさまざまなイベントや交流プロセスの日記が読める
「タイムライン」が完成

TURNフェス３開催
テーマを「TURNのアクセシビリティ」とし、３日間をとおして
同時多発的に多数のプログラムを実施

9月　「TURN in BIENALSUR」展覧会・ワークショップ開幕
ブエノスアイレス、リマで取り組んだ交流プログラムをもとに、
展覧会での作品展示とワークショップを実施

10月　第２回 TURNミーティング「TURNを検証するⅠ」開催
ゲストと「アートプロジェクト」や「ダイバーシティ」の
多彩な事例発表を通して、TURN の目的を再確認

11月　第３回 TURNミーティング「TURNを検証するⅡ」開催
ゲストと「社会包摂」と「社会実装」をテーマに、TURNが描く社会を構想

12月　TURN LAND 本格始動
ハーモニー、板橋区立小茂根福祉園、クラフト工房 La Mano、こども会議
の４施設が、2017 年度に開く TURN LAND として決定

TURNは、日本財団アール・ブリュット美術館合同企画展2014−2015「TURN（ひとがはじめからもっている力）／陸から海へ」（2014〜2015年）をきっかけに生まれ、平成27年度に、東京2020 オリンピック・パラリンピックの文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトとして始動した。

凡 例

本書は、「TURN」における以下の資料（2017年1月～12月）をもとに作成しています。

交流プログラム日報 —— 参加アーティストが、福祉施設等にて交流した際に綴った日報

TURN公式ウェブサイト「タイムライン」 —— TURNの活動日誌を一部加筆修正し、ウェブサイト上で公開　https://turn-project.com/timeline

文字起こしデータ

・「TURN」の交流を見る、聞く、語る　中間報告会
2017年1月14日、東京藝術大学で開催された平成28年度の中間報告会

・TURNフェス2
2017年3月3−5日、東京都美術館で開催し、会期中に実施したトークイベント等のプログラム

・TURNフェス3
2017年8月18−20日、東京都美術館で開催し、会期中に実施したトークイベント等のプログラム

・TURNミーティング
TURNを共有し、意見交換する開かれた場。2017年6月～11月にかけて3回、東京藝術大学にて開催

インタビュー —— プロジェクトメンバーへ実施したインタビュー

TURN in BIENALSUR —— 第1回国際現代美術ビエンナーレ「BIENALSUR」にTURNが招聘され、2017年7月～10月にかけて実施した交流プログラム及び展覧会・ワークショップでのやり取り

メール —— プロジェクトの進行過程でやり取りされたメール

本書は、2018年1月31日現在の情報に基づきます。

TURN NOTE

美術館とか文化施設とかになっていく

自分が持っていない価値観に出会える場所っていうのが文化施設のひとつの役割だとしたら、僕は福祉施設に行った時に、自分が味わったことがないような価値観とか日常では体験できなかったような時間と出会うので、僕にとってはそれが文化施設になりえる時間として感じられた。美術館の役割って美術館だけが考えるんじゃなくて、美術館の枠を広げると、その延長線上にはいろんなところが美術館とか文化施設とかになっていく可能性があるのかなって思います。

2017年8月18日 TURNフェス3「新しい学びを考える」より

日比野克彦

2014年の障害者支援施設でのショートステイ体験を機に「ひとがはじめからもっている力」に関心を抱き、2015年よりアートプロジェクトとして「TURN」を監修する。岐阜県美術館長も務める。

福祉施設はブラジルより遠い──。2014年、「みずのき」でのショートステイ（※障害者のための短期入所支援制度）を直前に控えた日比野の言葉である。そのときの衝撃を美術館でのアートとの出会いになぞらえた、日比野ならではの発言。TURNフェス3で東京藝術大学教授と美術館の館長という共通の役職を持つ住友文彦を相手に、美術館を含む文化施設の新しい捉え方について語りかけた。

細いライン

まだまだ、いろんなタイプの障害があると思うのですが、それなりに少しだけ関係がある仕掛けを細いラインの中に閉じ込めていけると面白いかなと思っていました。その細いラインがいろんなメッセージを秘めている、そんな感じです。

2017年7月18日 メールより

馬場正尊

2003年オープン・エーを設立。建築設計、都市計画、執筆などを行うとともに、新しい視点で全国各地の不動産を発見し紹介する不動産メディア「R不動産」を展開。

TURNフェス3の会場内。進行方向に沿った展示壁の右側に、角材で作った一本の細いラインを行き渡らせた。手すりのようにして右手を添えながら歩いてみると、展示空間が変わるたびに手に触れるテクスチャーも変化することがわかる。それぞれ異なる手触りが秘めている「何か」に少しだけ関係してみたい。そんなささやかな馬場の好奇心が、TURNフェス3を象徴するサインになった。

居場所をつくる

今日は、自分がここにいることが当たり前になってきているのを感じる。初めは利用者でもスタッフでもない曖昧なポジションで所在なくこども食堂にいたのだけど、今は何となく配膳を手伝ったり、「今日はどうする？」と訊かれたら一緒にご飯を食べたり、子供たちやお母さんたちとお話したり。当たり前になったのは、この場にいる人たちが緩やかに僕を受け入れてくれること、そして僕がこの環境を受け入れていることのふたつがつくる、見えないオブジェのようなものがあるからなんだろうと思う。通いはじめた当初、近藤さんが教えてくれた「居場所をつくる」というのは、これなのかも知れない。そしてそれは実にゆっくりと生まれるのだろうなぁと。

2017年３月９日 日報より

永 岡 大 輔

アーティスト。鉛筆の描画をもとにした映像作品の制作や、創造の瞬間を捉える実験的なドローイングを行う。また近年は、「球体の家」をテーマとした作品制作に取り組んでいる。TURNでは「こども会議」との交流をつづける他、「TURN in BIENALSUR」に参加し、ブエノスアイレスで発達障害のある児童らとの交流プログラムを行った。

—

近藤博子さん ——「気まぐれ八百屋だんだん」店主。2016年より「こども会議」としてTURNに参加。

交流プログラムでは、アーティストが、交流先の施設に集う人たちの魅力に気づいていくプロセスであることはもちろん、アーティスト自身が、交流先に馴染んでいくプロセスも大切にしたいと思っている。「馴染む」という表現はとても難しく、アーティストによっても、交流先の雰囲気や状況によっても捉え方は異なるだろう。今回、永岡は自身の交流先での居心地の変化を「見えないオブジェ」の存在に例えた。

洞窟にもう一回行けないか

気配のあるほうに、何となく自分が感じるほうに進んで行ったら、「展示室」という概念のレイヤーに、なぜか洞窟の入り口が現れて、それが両方あるんです。すごく洞窟のほうに行きたいと思ってそちらに歩いていくと、洞窟の奥にすごく大きい水溜りみたいなものがあって、これは何なんだろうと思っていました。それを探していったときに、触っていて卓球台のようなものがあったんです。そこに、ピンポン玉を誰かに渡されて、見えない中で卓球をしたのですが、そのときにまた展示室であるというレイヤーから洞窟のレイヤーがあることに気づいて、これがもしかしたら「気配」なのかもしれないと思って写真を撮りました。それでまた進んで行くと、実際の展示室の壁にぶつかったんですよ（笑）。そのあとはしばらく、自分は展示室の中を歩いているという概念からまた逃れられなくなりました。なんとかその洞窟にもう一回行けないかという感じで、空間を触りながら歩いていく状態になりました。

2017年９月９日 インタビューより

荒 神 明 香

現代芸術活動チーム【目】の中心メンバーとして、個々のクリエイティビティを特性化し、連携を重視するチーム型芸術活動を展開。ディレクターの南川憲二とともに、昨年度２ヶ所の障害者支援施設への視察の後、TURNフェス３に参加。

TURNフェス３の三日間、荒神はアイマスクとイヤーマフにポラロイドカメラを首から下げるという出で立ちで過ごし通した。つまり、会期中に会場で起こったすべての出来事を目にすることも、耳にすることもなく、ただそこにある「気配」を記録するという事に徹したのだ。もちろん「気配」の定義も用意していない。フェスの閉幕後、物理的にも精神的にも探索しつづけたこの特異な体験を語ってもらった。

表現の歴史を再考する時

「一緒に行った『見える人』はみんな真っ暗な洞窟を怖がったけど、私にとっては普段と同じよ（笑）」。
「服はどうやって選ぶの？」
「ピンク色って、（岩田さんにとって）どんな色ですか？」
「宇宙の存在をどう考えている？」
「目を閉じて話すと、聞きたい音が耳に入ってきますね！」
次々と質問が起こり、岩田さんとの対話にアーティストたちは心踊らせていた。それはなぜか？ これまで「アート」は視覚を最上位とした表現の歴史と言えるだろう。僕たちは今、その歴史を再考する時に立っているのだ。一方向からしか認識できない「視覚」だけではなく、全知覚を総動員する表現にドキドキするのだ。

2017年 9月3日 タイムライン
「見ることについてのリサーチ その3 ～TURNフェス3～」より

山 城 大 督

映像の時間概念を空間やプロジェクトへ応用し、その場でしか体験できない「時間」を作品として展開する。「Nadegata Instant Party（中崎透 + 山城大督 + 野田智子）」のメンバーとしても活躍。TURNでは、アプローズ南青山との2年にわたる交流プログラムの後、今年度から「感覚と表現」を再考するプロジェクト「センサリーメディアラボラトリー（SML）」を立ち上げ、リサーチを開始。
—
岩田美津子さん ——てんやく絵本の製作、貸出しを行うNPO法人てんやく絵本ふれあい文庫代表。

山城は、TURNの前身となった企画展への参加の後、2年にわたる交流プログラムの経験を経て、「視覚情報」と「絵本」をテーマとしたリサーチに着手した。これは、自身も活躍するメディアアートと呼ばれる分野と、二児の父親ということが関心を寄せる出発点であるという。上述のやり取りは、「TURNフェス3」を終え、リサーチに協力してくださった岩田さんを囲んだ懇親会での様子。

彼らのセーフゾーン

美術館に来るって結構緊張するじゃないですか。白い壁の空間だし。でも印象的だったのは、町の中ではいろんな人から見られていると感じる彼らにとってみれば、美術館の中では自分たちが見る側だから、見られているわけではないので、それがかえって緊張をつくらない。実は、美術館は彼らにとってセーフゾーンになりえるんだっていう発見は、僕が美術館のことを非日常で緊張っていう部分だけを考えていたのに対して、違う部分を教えてくれた。

2017年 8月18日 TURNフェス3「新しい学びを考える」より

住 友 文 彦

アーツ前橋館長。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授。ICC/NTTインターコミュニケーションセンター、東京都現代美術館などに勤務した後現職。2016年、アートが福祉、教育、医療の現場に入っていくプロジェクト型の企画展「表現の森 協働としてのアート」を開催。

日比野との対談の中で住友は、自身が館長を務めるアーツ前橋で開催した企画展「表現の森 協働としてのアート」で、引きこもりや不登校経験のある若者たちと出会った経験について口にした。これは、美術館がまだまだいろんな可能性を秘めていること、美術館のあり方は変容しうることを私たちに想像させた。

状況から生まれてくるもの

普段から、「不安定さ」をあえて探しているようなところはあります。でもその不安定さというのは、これまで自分の中からつくり出してきたもので、今回は他者から意図せずもたらされるというところに大きな違いがありました。すでに存在するメソッドに沿って何かをやっていくという現実に対して、それに従わずに常に新しいものを新しい方法でつくり出していくのがアーティストといえるでしょう。だけど、逆にそれを試みることができない場所に置かれている状態でした。なので、ある程度自分で形を作ってみようとコントロールしたところはあるけれど、それは最低限に留めて、そのあとは彼らの状況から生まれてくるものに従おうと思いました。

2017年9月18日 インタビューより

Sebastian Camacho Ramirez
（セバスチャン・カマーチョ・ラミレス）

コロンビア出身。「TURN in BIENALSUR」に参加したアルゼンチン在住のアーティスト。母国に伝わる「チャキーラ」と呼ばれるビーズ編みの手法を用いて、ブエノスアイレスの特別支援学校で、発達障害児とともに交流プログラムを実施。

展覧会の開幕から数日後、通訳を交えて作家一人ひとりとの振り返りを行った。柔らかな口調で語り出した彼は、いかにこのプロジェクトが普段のアーティストワークと異なっていたかを語る。インタビューの最後には、まだ善し悪しを判断するまでには至っていないものの、紛れもなく重要な経験だったと締めくくった。

アーティストができること

現場の経験はすごいなと思うけども、福祉従事者ではない自分には見えない出来事に感心する一方、だからこそ外部からたまに関わるアーティストにしかできないアプローチをしなければならない。福祉施設に行くときは、いつも自分は外部だし、素人になる。でもその視線からでないと作れないことはある。作品は、時にぼやけたり、軽やかになったり、なにげない視点だったり、そんなものが必要だ。実際の現場に行くと、自分のできることと、立ち位置を確認できる。

2017年4月16日 タイムライン
「福祉の現場を通して、アーティストができること」より

EAT＆ART TARO

食にまつわるアートプロジェクトを展開するアーティスト。TURNでは、知的障害者の食事情をきっかけに生まれた「夕飯コンシェルジュ」、高齢者の嚥下障害から考えた「フードコントロール」を発表。今年度は、摂食障害のリサーチに着手。

EAT&ART TAROは、特定の交流先を持たずにその都度自身で決めたテーマに沿って、視察、単発の交流、インタビューなどを繰り返しながらTURNフェスで発表する企画をつくり上げていく。その時期に関心を寄せるテーマに対応した場面だけでなく、その周りの様子や背景に触れながら、これまでは知らなかった日常との出会いと丁寧に対峙し、自身のあり方を形づくっていく。

動いていくものをデザインする

プロジェクトというのは、アウトラインがあって、コンセプトができていて、それに沿ってデザインをしていくというのが普通なんですけれども、TURNはとにかく動いていく。動いていくもののデザインをするときに、いわゆる普通のやり方だと難しい。でも、動いていくっていうのはネガティブなことではなくむしろ面白いのではないかと。そういう状況のものをどうやってデザインしたらいいかを大きなコンセプトとして設計しています。

2017年6月11日 第1回TURNミーティングより

加藤賢策

グラフィックデザイナー。デザインチーム／ラボラトリーズ代表。
アート、建築、思想、ファッションなど多領域にわたる制作を行う。
TURNの公式ウェブサイトのデザインを担当している。

TURNで、1年目、2年目はグラフィック、3年目はウェブサイトのデザインを担っているデザイナーの加藤は、明確な言葉で説明しにくいこのプロジェクトに、根気づよく関わりつづけている一人。公式ウェブサイトをリニューアルするにあたり、この日はお披露目の場でもあった。わかるために価値の固定化を印象づけるデザインではなく、わからないことや変わっていくことを愉しむデザインを考える。

やさしさが生まれる

不穏、境界、排他性、不在は、新しい何かに変わりうる素材、エネルギー、そして可能性になる。地味で目立たないものも、子供一人ひとりの需要に応じて多様に変化していく。毎回の活動では、他者を理解し、空間を共有し、身振り、視線、動作でコミュニケーションをとる。この小学校では、些細な言葉が暴力的な反応を起動させることも少なくないが、「編む」ことが集中力を促し、暴力の必要性を否定してくれる。そして、お互いが差し伸べあう言葉に、やさしさが生まれる。

2017年7月中旬「TURN in BIENALSUR」日報より

Henry Ortiz Tapia（ヘンリー・オルティス・タピア）

ペルー・リマ在住のアーティスト。国立の美術学校の教員も務める。
「TURN in BIENALSUR」に参加し、リマ市内のバリオスアルトスという地域の小学生らと、「シクラ」と呼ばれる葦編みの技法を用いた交流プログラムを実施。

バリオスアルトスという地域は、インカ帝国時代の名残を残す歴史的な旧市街なのだが、現在、深刻な治安の悪化と貧困の問題を抱え、リマ市民でさえも立ち入ることは滅多にないという。この地域の小学校に通う子供たちを取り巻く環境は決して易しくないものの、Henry Ortiz Tapiaは、シクラ編みを用いた交流の中で、双方に起こる反応や関係性の変遷を、見逃すことなく日報に留めた。

アーティストが来ることで気づかされた

TURNは、自分たちでは気づかなかったことに気づくきっかけになりました。五十嵐さんが言っていた印象的な言葉に、「宇佐美さんの糸巻きは、La Manoの中にある『染め』の作業と『織り』の作業の間を繋ぐ仕事をしているのではないか」というのがありました。この視点は普段自分たちが現場にいて気づかないことを、アーティストが来ることで気づかされた象徴的な出来事でした。

2017年6月11日 第1回TURNミーティングより

高野賢二

クラフト工房La Mano施設長。町田市にある築90年の民家で、障害のある人とともにものづくりに励んでいる。初年度よりTURNに参加し、アーティストの五十嵐靖晃と交流を重ねている他、2017年度からはTURN LANDに着手する。

—

宇佐美俊太郎さん ——クラフト工房La Manoの利用者の一人で、糸巻きの作業を専任で行う。

アーティストの受け入れに対して、交流先の施設がただ受け身になるのではなく、アーティストの視点が日々の支援現場への新しい気づきや刺激につながることを目指していきたい。高野は交流プログラムをとおして、五十嵐の観点とそれを豊かな言葉へ変換する場面に何度も触れ、La Manoの日常をより良くしようと試みをつづけている。

世界は多彩な人々であふれている

アートが、社会を多彩なものにするわけではありません。なぜなら既に世界は多彩な人々であふれているからです。アートができるのは、既に存在する多彩さをより明らかに見せる新たな方法を生み出すことです。アートを社会で実装することもできません。なぜならアートも既に存在するからです。創造性は、いつでも人々の生活の中にあふれています。求められるとするならば、その創造性を引き出し、社会へとひらく有意義な手段を発見するということです。

2017年11月19日 第3回TURNミーティング

James Jack（ジェームズ・ジャック）

アメリカ出身。社会と環境に深く関わる制作を行っている。TURNには2015年より参加し、ハーモニーとの2年にわたる交流プログラムを実施した後、今年度はTURN LABの一環で客観的にTURNを捉え研究している。

「アートあるいはTURNの社会実装は可能か」という問いから、今年度のTURNがスタートした。James Jackはその問いを受け、研究プログラム「TURN LAB」で考察し、リサーチした内容の中間報告を行った。「実装」とは、無かった機能を新しく挿入するための手立てを意味し、TURNが目指したいことは「すでにある何か」を可視化することではないかと考察した。

スイッチが入った

それぞれが編んでいくと糸の通し方に個性があるということに気がついて、じゃあその個性を生かすには細い糸じゃ難しいから太い糸にしてみようかとか、片手で押さえて編むのが難しい子にはスタンドを作って両手で編むようにしてみようか、とか。アレハンドラは職人的なところがあったんだけれども、編み方自体を考えられるようになるというスイッチが入ったことによって、まったく違う世界観が今、アレハンドラの作家としての世界観の中に広がりつつある。

2017年 8月18日 TURNフェス3
「TURN in BIENALSUR 出発直前トーク」より

日 比 野 克 彦

2014年の障害者支援施設でのショートステイ体験を機に「ひとがはじめからもっている力」に関心を抱き、2015年よりアートプロジェクトとして「TURN」を監修する。岐阜県美術館館長も務める。
—
アレハンドラ・ミスライ（Alejandra Mizrahi）——「TURN in BIENALSUR」に参加した、アルゼンチン在住のアーティスト。

南米では、障害のある人とのアートプロジェクトの事例はまだほとんど存在しない。そのため、現地のアーティストの交流では、「教える」「教わる」という関係性をいかにほどくかということが求められる。アレハンドラ・ミスライも専門的に刺繍の技術を持っていることから、自閉症の彼らへの接し方は教師や職人を思わせた。しかし、模索がつづく交流のプロセスで生まれた関係性の変化を、日比野は見逃さず評価した。

柔らかい状態で勘違い

「完璧」に付随する「正解・本当」が邪魔をする。完璧になろうとすると、多くを排除しなければならない。何かが排除される状況の裏側には、完璧や正解を目指さなければならないという圧力がある。個人的には不完全や未熟である状態を面白いと思う。そこにこそ可能性を感じている。「どうしてもそうなってしまう」部分を大切にし、柔らかい状態で勘違いしながら見えないものをつくろうとする。綺麗に言うと「寛容」。「何を伝えようとしているのか？」と問われがちだけど、そんなのクソ食らえだ。何かを伝えようとしているのではない、わからないからやっている。興味関心の向かう何かに手を伸ばし、触れようとし、つながろうとする。その行為そのものが大切だと思う。それを繰り返すうちに予想できない状態が生まれ、そこから様々な連鎖が生まれる。

2017年 10月 8日 第2回 TURNミーティングより

藤 浩 志

美術家、秋田公立美術大学副学長・教授。地域社会をフィールドとした表現活動を志向し、全国各地の現場で対話と地域実験を重ねる。
第2回 TURN ミーティングのゲストスピーカーとして登壇。

アートというコードを持っていない現場に赴くと、否応無しに「なぜここにアートが必要なのか」という問いを突きつけられる。アートを TURN に置き換えても然りである。10 月の TURN ミーティングでの藤の発言は、先の問いに答えうる言葉を探す途上にある私たちに、アートであることの必要性の示唆を与えてくれた。

価値観が逆さまになる

現代の社会において、“違い”とされているのは一体何なのか？ファッションを学ぶ僕らが、彼らから何を学び、また何を未来に創り出し、表現出来るのか？という問いから、そのようなことを学生と共に考えるきっかけ作りとなる企画を考えました。僕の中には決して、答えのようなものはありません。
（中略）
あくまで「装い」を軸にしながらも、様々なコミュニケーションが生まれ、視点が混ざり合いながら、時に価値観が逆さまになるような空間性、入口も出口もアチラコチラに様々あるような価値観が浮遊した状態のような感覚になる時間になりました。この感覚を味わうことこそが、学びに最も大切なことなのではないでしょうか。

2017年９月11日 タイムライン「学びの天命反転地点」より

山 縣 良 和

ファッションデザイナー。2007 年、writtenafterwards を設立。TURNフェス３で、ファッション表現の実験、学びの場として主宰する「ここのがっこう」としょうぶ学園とのコラボレーションによる空間をつくり出し、講評会を行った。

山縣良和としょうぶ学園。そのマッチングは、創作活動を行う福祉分野を知る者としては、成功を予見しやすい。しかしTURN で取り組む以上、これまでに経験したことのない部分を互いに知り合うことと、意表をつく発表を望んだ。そして、TURN フェス３で山縣が持ち込んだのは、大量な作品群と自ら主宰するファッションスクールの大勢の学生たちだった。

何かに触れていると安心する

初めはサインが大きくてコントラストが強いビジュアルを考えましたが、空間をつくっていくデザイナーとしては、見える人たちが経験する空間体験を犠牲にするのは嫌だ、と思いました。そしてぜんぜん違う次元のサイン計画がないかと考えていました。暗いところとか、階段を探すときは、僕は常に壁に手をあてながら行動しています。また暗闇で誰かに触れたり、手をつないだり、服につかまったりすると安心します。「何かに触れていると安心するんだな」と思い、それをそのままサイン計画にしようと思いました。

2017年８月20日
TURNフェス３「アクセシビリティミーティング」より

馬 場 正 尊

2003年オープン・エーを設立。建築設計、都市計画、執筆などを行うとともに、新しい視点で全国各地の不動産を発見し紹介する不動産メディア「R不動産」を展開。

視覚障害が進み視野がだんだんと狭くなり、現在は中心視野はなく、端だけが僅かに残っている状態なのだという。TURNフェス３の最終日に実施したアクセシビリティを振返るトークイベントで馬場は、建築家としての専門性を損なうことなく、自らの障害を背景に、サイン計画を提案したプロセスを語った。

そこにもうダンスがある

施設利用者のみなさんの動きがダンサーよりもチャーミングなので、踊る意味って何だろうかと考えます。なぜなら、そこにもうダンスがあるし、僕が踊ったところで誰もダンスだとは捉えてなくて、「なんか、普通にそうやって動く人なんだ」ってくらいのことでした。

2017年３月４日 TURN フェス２トークイベントより

森 山 開 次

ダンサー・振付家。2001 年、エディンバラフェスティバルにて「今年最も才能あるダンサーの一人」と評された後、演出振付出演するダンス作品の発表を開始し、独自の表現世界で注目を集める。2017年、SLOW MOVEMENT「The Eternal Symphony 2nd mov.」の振付・演出を手がける。

ダンス、演劇、映画など幅広く活動する多忙なスケジュールの合間を縫うようにして、森山は、プライベート寄りの位置づけとして「TURN」のための時間をとった。初年度、みずのき、クリエイティブサポートレッツ、リサイクル洗びんセンターの３ヶ所に赴いた森山は、そこに暮らし、そこで過ごし、そこで働く障害のある人たちとのコミュニケーションの方法としてダンスを踊った。

表現することと受け取ること

TURN LAND というのは、臨機応変に世の中につくりうるものなのかと思っています。そのときに、表現を生み出すだけでなくて、受け取るということや、表現をすることと受け取ることにどういう繋がりがあるのかということについても、実験や模索ができると面白いんじゃないかな、という風にも思います。

2017年６月11日 第１回TURNミーティングより

朝 倉 景 樹

2015年度から TURNに参加するシューレ大学のスタッフ。長年、引きこもり・不登校など、生きづらさを抱える若者の学びの活動支援を行っている。

アートを活動に取り入れるとなると、制作する人や創作そのものに関心を向けてしまいがちである。しかし、表現が生まれるときには実にさまざまな相関関係が発生する。とくに受け取る側の存在も大切にしていきたいと考える朝倉の発言は、“アーティストと出会う側”だからこその気づきといえるだろう。

初めて見た光景

目的地の公園につくと、素晴らしい風。前からも、後ろからも気持ちよく吹き抜けた。やはり外はいいな。加藤さんが竿を持ちたがった。手に力が入りやすいので、まず奥田さんが加藤さんの指を持って脱力をしてから、ゆっくり手のひらを開き、竿をあててあげる。すると、すっと手が握られる。これも、初めて見た光景だ。

2017年5月31日 日報より

大西健太郎

ダンサー、パフォーマー。2016年度からTURNにアーティストとして参加し板橋区立小茂根福祉園との交流を行う。他者によって切り取られた自分のヒトガタ「みーらいらい」を宙に浮かべ散歩するなどの活動を続けている。

—

加藤さん —— 板橋区立小茂根福祉園の利用者
奥田さん —— 板橋区立小茂根福祉園の生活支援員

板橋区立小茂根福祉園は、重度重複障害といわれる知的と身体の両方に重い障害を持つ方たちも多く利用している。障害の特性ゆえに、「持つ」という行為が完結するまでのプロセスを何段階にも分け、支援員がサポートしていくその様子は、大西にとってダンスそのもののように感じられたのだろうと想像する。

島っていう比喩はいい

カヌーで太平洋を渡った友人が聞かせてくれたんだけど、水平線に島が見えるって、一大事なんだって。水があり、植物が生えていて、土があるといった、僕らにしてみれば当たり前のようなことが、海の上では奇跡のように感じられるんだと。アーティストであれ、施設の利用者であれ、あるいはふと見つけて訪ねてくる人であれ、そこが上陸可能な島であるというのはすごい。島っていう比喩はいいなと思いました。飛行機で着く人たちに対しては入管システムなどがしっかりあるわけですが、海から入ってくる人たちにはそれほどない。結構自由に国境を越えるし、自由に寄港しているんですよ。ここでは福祉施設として運営されているわけだけど、そこが島だとか入り江だとか、港のようになって、いろんな方々が身を寄せたり上陸して、そこにいる人たちと関わっていく。「LAND（ランド）」という概念は良いな、と思って聞いています。

2017年8月19日 TURNフェス3「TURN LANDをひらく」より

西村佳哲

プランニング・ディレクター、働き方研究家。建築分野を経て、ウェブサイトや公共空間のメディアづくりなど、各種デザインプロジェクトに携わる。また働き方研究、教育・ワークショップなどをとおして、最近は小さな会社や組織、地域の相談役的な存在に。

多様な人々の往来を受け止める文化施設的機能を持った「TURN LAND」としていざ実施しようと思っても、どうすれば形になっていくのだろうかと試行錯誤が続いていた。この日、ゲストとして参加した西村が語った情景豊かなTURN LANDのイメージは、課題や不安が見え隠れする現状をほぐし、私たちの背中をやさしく押してくれた。

また次の悩みが来る

「アートを活動に組み込んだが思った以上にしんどいぞ」という吐露は、今後我々がずっと共有していく問題で、解決した瞬間にまた次の悩みが来る。まさにアート従事者が日々抱えている問題そのものなんですけれども、その問題は担当者一人の問題ではなく、TURNに関わる、あるいはアートに何らかの形で従事する者の共通の課題だと思っています。共通の課題の根深さというか、重要さの報告を大事にしているがゆえに、「大変なんだ」というところをストレートな表現で共有できたことは、交流の深まりともいえるのかもしれない。

2017年6月11日 第1回TURNミーティングより

森 司

アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京2020公認文化オリンピアードの一つである「TURN」を、プロジェクトディレクターとして牽引する。

交流プログラムの3年目が始まろうとするこの時期に、一人の福祉施設職員が吐露した継続することへの課題。監修者の日比野は、熱量とスピードを決して下げることなく展開の夢を語り、コーディネーターの奥山は、施設やアーティストの傾聴役に徹する。プロジェクトディレクターである森は、夢で終わらせるのでも、現実で悲嘆に暮れるのでもなく、投げかけられた問いの持つ質感を捉えようと努め、応答する。

できる、できない、よりも深いところに

できる、できない、よりも深いところに大切な事の多くはある。人との関わりの中で重要なのは“何かができるかどうか”ではないことをしっかりと認識した瞬間だった。それに何かが「できない」のに生き抜いているということは、特別に何かが「できる」人であることも何度となく痛感させられた。同時に何かができるとされている人が、その分できないことに溢れていることにも気付かされた。障害を抱える人やその周囲で生きる人と向き合った時、「健常者であるあなたたちは、すぐにわたしたちを見捨てる」そんな声にならない叫びのようなものを感じて傷つく瞬間もあった。長い歴史の中で、さまざまな積み重ねで無自覚に傷つけている事が沢山あるのだろう。まだ自覚できていない差別や偏見が自分の中にもあるのかもしれない。

2017年 9月7日 タイムライン
「光の広場③：社会的障害を持つ方たちとの協創を経て」より

富塚絵美

アートディレクター、演出・振付、パフォーマー、イラストレーター。通称ちょり。初年度からTURNに参加し、TURNフェス3ではあえて声を用いずコミュニケーションを行う「光の広場」を発表。

TURNフェス3では、交流プログラムの成果発表だけではなく、いくつかのオリジナル企画を採用した。その一つ、「光の広場」と名付けられた3日間のためだけの特別なプログラムは、富塚が経験したこれまでの様々な出会いや関わりの経験にもとづく機微や陰影が背景に据えられており、交流の重要性を物語る。

同じ場所にいた

荒神の話を聞いていて、自分では目で見て思ったことを言葉にできなかったのですが、代わりに言葉にしてくれている気がしました。「TURN」が面白いなと思った瞬間についてよく考えてみると、何かフワっと浮かんで繋がったように感じた時が何回かあったなって。それを荒神がうまく「洞窟」と言ってくれている気がした。結局、同じ場所にいたということは、それだけですごくコミュニケーションしていたのだと思いました。

2017年 9月9日 インタビューより

南川憲二

現代芸術活動チーム【目】の中心メンバーとして、個々のクリエイティビティを特性化し、連携を重視するチーム型芸術活動を展開。アーティストの荒神明香とともに、昨年度２ヶ所の障害者支援施設への視察の後、TURNフェス３に参加。

TURNフェス３閉幕後、【目】のアトリエがある埼玉県で行われたインタビューでの言葉。フェスの開催期間中、目で見ること、耳で聞くことを断ち過ごし抜いたパートナーの荒神の隣で、伴走者として見聞きした体験と、荒神の感じ取った「気配」との間に共通するイメージがあったことが語られた。

撮影者

アーティストと施設利用者。あるいはアーティストと施設関係者。それぞれのコミュニティにおいて、その「外」にいた「個」と、その「内」にいた「個」の間で行われる交流は全く違う様相を見せながら、それぞれにとって仮に設定された終着点へと向かっていきます。両者に共通しているのは、そこで行われる交流が「アーティスト」や「利用者」（あるいは施設関係者）といった「公」の立場や肩書きに基づくものではなく「個」を起点とした関係であるという点です。では、その場において常にカメラを抱えていた「撮影者」は「公」であるのか「個」であるのかどちらなのでしょうか。

2017年 3月3日 TURNフェス2 より

田村大

映像演出・脚本家。映像制作会社「らくだスタジオ」所属。初年度からTURNに関わり、交流プログラム、TURNフェス、TURN LANDの各プログラムを撮影している。今年度から、記録映像の作品化に向けて取り組んでいる。

TURNでは、障害があることやマイノリティの立場にあることを公にすることを躊躇する交流先も少なくない。そのため、初年度から撮影者として携わる田村にとっては動きの取りづらい現場であるに違いない。それでも、TURNフェス２の会場で交流プログラムを記録したドキュメント映像の横に掲示されたステイトメントには、自身の関わり方への気づきが記され、「TURN」を捉える撮影者としての前向きな姿勢が伺えた。

「自覚しない表現」みたいなもの

日比野さんがよく話していることなのですが、人間は何らかの表現をしたがる生き物だから、表現しようとしなくても結果的にしている。その結果的にしている表現をすくい取っていくこと、「自覚しない表現」みたいなものの方へどのように開いていけるのかというところを、探っていきたいと思っています。

2017年3月4日 TURN フェス2 トークイベントより

森 司

アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京2020公認文化オリンピアードの一つである「TURN」を、プロジェクトディレクターとして牽引する。

ダンサーの森山開次との対談の場での発言。森山は、精神性も含めた人間の持つすべての機能を最大限にまで引き上げ、舞台空間に表現として結実させる。では、初めての試みとなった福祉施設での滞在中の交流を収めた3つの映像は、表現された作品といえるのだろうか。TURN には、この手の所在を明らかにしにくい出来事が数多く表出する。映像の中でいつもと違う空間に舞う森山を、本人と共にビデオを見ながら、TURN 的表現について語った。

違う見方をする

リマ市で働く心理学者と話しあう時間を持つことができた。彼は、TURN に大変関心を寄せ、交流プログラムに参加している何人かの子供たちの様子について訊ねてきた。ただ、彼の発言で気になったことが一つあった。問題があれば、その原因を想定することが現実的な対処法であると言うのだ。でも僕は今、違う見方をするようになっている。

2017年7月中旬「TURN in BIENALSUR」日報より

Henry Ortiz Tapia（ヘンリー・オルティス・タピア）

ペルー・リマ在住のアーティスト。国立の美術学校の教員も務める。「TURN in BIENALSUR」に参加し、リマ市内のバリオスアルトスという地域の小学生らと、「シクラ」と呼ばれる葦編みの技法を用いた交流プログラムを実施。

心理学や社会福祉など、当事者支援に従事する者の専門性において、目にする事象の原因や因果関係の分析は不可欠である。しかし、そのアプローチは相手の状況を決めつけてしまう傾向を持つこともある。そのような接し方に対し、ヘンリーがアーティストとして違和感を口にした、興味深いエピソード。どんな「違う見方」なのかについて明言化されていなかったが、ここに TURN がアートのプログラムでなくてはならない理由がある。

コンフォートゾーンが存在していた

この時思ったのは、TURNフェス3の会場には僕が形としては見ることができないけれど、太田君やタケシ君にはハッキリと感じられるコンフォートゾーンがあるのではないかということです。レッツの利用者の皆さんは、生活環境の変化についていくことが難しい場合が多々あります。刻々と変わっていく気温、湿度、風、光、音、壁や床の質感など、日頃僕があまり気にせずやり過ごしているような変化も彼らにとっては耐え難いストレスとなることがあるのです。その変化を察知するために、彼らの身体センサーはきっと僕のものより遥かに繊細になっていると思います。そのセンサーを使って、太田君やタケシ君はフェスに意図的に用意されていたか、もしくは偶然そこに立ち上がってきたコンフォートゾーンを見つけ出していたのでしょう。そしてあの会場にそのコンフォートゾーンが存在していたことは、彼らにとってとても大切なことだったと思うのです。

2017年 9月1日 タイムライン
「TURNフェス3が生み出すコンフォートゾーン」より

テン ギョウ・クラ

ヴァガボンド（放浪する者）を自身のライフスタイルとして、教師の活動をベースに国や地域を問わず移動と滞在を繰り返し、フォト・ストーリーを制作している。
—
太田君（太田燎さん）—— 認定NPO法人クリエイティブサポートレッツの利用者。
タケシ君（久保田壮さん）—— 同法人の利用者。

TURNフェス3で、クリエイティブサポートレッツに通う利用者とともに、レッツのある浜松から上野の東京都美術館までやって来るという企画を担ったテンギョウ・クラ。もちろん紆余曲折はあったものの、無事に会期初日に会場までたどり着くことができた。その後、到着した後の会場で彼らとともに過ごした時間の中に、彼らを通じて、フェスの会場にあった重要な「何か」をコンフォートゾーンとして見出し、後日振返った。

楽しむ

・自分が楽しむ、場を仕切りすぎない、出来事を楽しむ

・時間に追われて作業しない、ゆっくりでよい

・偶発的な何かを楽しむ

・決まりはない、決めすぎない。全体を見渡せるように

2017年 8月19日 メールより

久保田瑛

TURN運営本部のメンバーとしてプロジェクトに関わる。TURNフェス3で、大西健太郎＋板橋区立小茂根福祉園の「風あるき ー宙に登るー」を担当し、施設での交流にも立ち会う。好きな時間は、小茂根福祉園のカフェでみんなとアイスコーヒーを飲むこと。

TURNフェス3で「風あるき ー宙に登るー」という参加型のパフォーマンスを担当した久保田が、企画者であるアーティストの大西とともに、フェス2日目の終了後に振り返りを行った際のやり取り。パートナーの小茂根福祉園の利用者たち、そしてサポーター（ボランティアスタッフ）たちとともに、どういった場所をつくり上げるか、試行錯誤がつづく。

私に伝えようとしてくれた

会場にあるすべての音をひろい、耳が聞こえない私が見てわかる形か、触ってわかる形にしてほしいと、みなさんにお願いしツアーをしました。面白かったのは、音だけではなく、ふるまいや、感じたことを私に伝えようとしてくれた表現があったことです。

2017年 8月20日
TURNフェス3「アクセシビリティミーティング」より

石 川 絵 理
NPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークの事務局長。聴覚に障害のある当事者が主体となって観劇支援を推進する活動を展開している。TURN では年間のイベントをとおしてアクセシビリティコーディネートを担当。

TURNフェス 3 では、ソフトリソースによるアクセシビリティサービスの試みとして、鑑賞ツアーを複数企画。その一つとして、石川と会場を巡るツアーを実施した。その中で起こった出来事を、最終日に実施したアクセシビリティミーティングで振り返った。

問いや疑問が生まれてくる

社会の中でのアートの役割、アートが機能するということがあり得るのか。今の社会的な問題にアートはどう関わっていくのか。関われるのか。関わらなくちゃいけないのか。関わるとしたらどう関わるのか。また、そこに関わる人はどういう情報を持っていないといけないのか。どう育成するのか。どう評価するのか、などなど・・・。連鎖した問題、疑問は出てくる。でも問いや疑問が生まれてくるということは、それが必要だからなのかなと思う。

2017年 11月19日 第3回 TURNミーティングより

日 比 野 克 彦
2014年の障害者支援施設でのショートステイ体験を機に「ひとがはじめからもっている力」に関心を抱き、2015年よりアートプロジェクトとして「TURN」を監修する。岐阜県美術館長も務める。

TURN を始めてから、その決して小さくない事業規模に対してアウトラインがわかりにくいと、内外からの意見や課題が絶えることはない。この日も、ゲストに迎えた研究者から、プロジェクトとして陥りがちな罠や、置き去りにしてしまっている繊細な事象があるかもしれないことが示唆された。日比野は、それら絶えることのない課題との向き合い方について、ある考え方を述べた。

利用者たちだけではない

障害者福祉サービスを標榜してやっているわけだけれども、実は対象としているのは障害を持っている人たちだけではない。心のトラブルを抱えた人たちは利用者ではなくボランティアの中に居たり、店先にやって来る人の中にいたり。僕たちが支援しなくてはいけない人、役割を果たさなくてはいけない対象の人たちは、受給者証を持った利用者たちだけではない。その意識を常に持って、やっています。特に精神障害は目に見えない障害ですから、登録した利用者以外の人たちに伝えていくというのはすごく大事なことだと思います。

2017年 8月19日 TURNフェス3「TURN LANDをひらく」より

新 澤 克 憲

「幻聴妄想かるた」でも知られる世田谷区にある障害者支援施設「ハーモニー」の施設長。利用者が安心して自分らしさを発揮できるような場を目指している。

TURN LAND が本格的に始動した今年度。TURN の交流先施設を中心に、従来の福祉事業所としてだけでない機能を持った新しいプログラムを立ち上げようと計画する中で、TURNフェス3の会場でトークイベントを開催した。なぜ TURN LAND で福祉施設をひらく必要があるのか。新澤の言葉は、それをやわらかく、そして明快に説明してくれた。

変化しない興味があってもいい

これまで自分にとって、興味やこだわりと呼ぶものは、ある変化を伴っていくものだと思っていた。が、この光景を目の当たりにした時、変化しない興味があってもいいんだという気分になった。なぜなら、目の前でゆっくりとみーらいらいを振り続ける彼の表情に一点の曇りもなかったからだ。

2017年 6月7日 タイムライン
「変化しない興味があってもいい」より

大 西 健 太 郎

ダンサー、パフォーマー。2016年度からTURNにアーティストとして参加し板橋区立小茂根福祉園との交流を行う。他者によって切り取られた自分のヒトガタ「みーらいらい」を宙に浮かべ散歩するなどの活動を続けている。

アーティストから提出される交流プログラムの日報は、自問自答するような文面になっていることも珍しくない。アーティストたちもまた、交流のプロセスで起こる空気感を感度高く捉え、鮮度の良い状態で感覚の中に留めようと試みている。

もっと真剣に困った方がいい

長生きをしているということが何も役に立たない象徴のようになって。これはどうしたらいいんだろうって。その時に、お年寄りだけが施設にいて、賑やかに楽しく一生懸命にやっていてもダメなんじゃないかなって。もっと混ざり合って、もっと法律じゃないところで困らなきゃダメなんじゃないか。もっと混乱しなきゃいけないんじゃないか。もっと真剣に困った方がいいんじゃないか。そして、言葉にならないこうした想いの表現は、やっぱりアートの力なんじゃないかって思うんです。

2017年6月11日 第1回TURNミーティングより

大井妙子

NPO法人ももの会理事長。学校の余裕教室を利用した高齢者を対象としたデイサービス事業「桃三ふれあいの家」、食堂があるコミュニティスペース「かがやき亭」を運営。今年度より交流先施設としてTURNに参加。

アート活動を取り入れたいと考える福祉施設はますます増えている。しかし、アートは楽しみだけをもたらすものではない。意識的に交流先施設から意見をもらった第1回TURNミーティングで、大井が発したこの行き場のない深く強い吐露のようなものが、アートを希求する施設側の動機となる。

状況を起こして実践している

大抵、アートはコンセプトに留まることが多い。でもTURNは、実際に状況を起こして実践している。今日のオープニングはとても素晴らしかった。

2017年9月18日
「TURN in BIENALSUR」オープニングレセプションより

Marlise Jozami（マルリース・ホサミ）

アルゼンチンを中心に、国内外30以上の都市をつなぎ開催された第1回国際現代美術ビエンナーレ「BIENALSUR」の執行役員の一人。

多様性やリレーショナルなプロセスを重視するTURNに対し、世界はどんな反応を示すだろうかと、期待と不安が交錯する中で展覧会の開幕を迎えた。Marlise Jozamiから受けた賛辞は、一人ひとりへの丁寧なアプローチを有したTURNのアクションが、遥か遠く南米の地でも共感を得たことを意味し、「BIENALSUR」との共振は、新しい時代のグローバリズムを創造しうる可能性を感じさせた。

みんなのものであり続けますように

光の広場には、たまに、重度の知的障害を抱えた人も訪れた。繊細な感度をもつ彼らがニコニコとご機嫌に寛いでくれた時、勝手な勘違いかも知れないけれど、なんとも言えない幸福感が湧いてきた。「作品が認識できない人にとって、アートはなんになるんだろう……」そんな私の愚問を瞬時に消し去った。いい作品が出来た時には、そこに訪れる人々の放つ気配が変わる。振る舞いも変わるし、気持ちに余裕もできて、人に優しくなれる。みんなが気楽にしているから、子供も気楽に大声をだして笑っていた。私がうまく説明しきれていないこと、静かにしていなきゃいけない場所ではないことを、みんなが汲み取ってくれていた。アートに興味がある人、福祉に興味がある人、どちらにも全然興味のない人……。色々な人がいて初めて成り立つアートがこれからはどんどん増えて、アートがTURNして、みんなのものであり続けますように。

2017年9月7日 タイムライン
「光の広場③：社会的障害を持つ方たちとの協創を経て」より

富塚絵美

アートディレクター、演出・振付、パフォーマー、イラストレーター。
通称ちょり。初年度からTURNに参加し、TURNフェス3ではあえて声を用いずコミュニケーションを行う「光の広場」を発表。

アーティストならではの言葉、というものを感じるときがある。決して難しい言葉の羅列でなく語りかけるように柔らかいのに、それでいて強く、しなやかに読み手を誘うその言葉は、力みがちな心を刺激する。TURNフェス3閉幕後、参加したアーティストたちに振り返りの寄稿文を依頼し、公式ウェブサイトに掲載した。「ちょり」と慕われる富塚の言葉から。

圧倒的な寛容さ

そこには多種多様な障害を持った人々がいた。普通に考えると何らかの欠落を抱えている人々、ということになると思う。でも、流れている空気には欠落の欠片もなかった。それらをごく自然に補い合っている優しさや、欠落に対する圧倒的な寛容さ。その空間では、僕自身はどうでもいい存在であり、同時にあらゆることを許してくれる安心感で満ちていた気がする。初めての感覚だった。

2017年12月18日 季刊誌『alterna』より

馬場正尊

2003年オープン・エーを設立。建築設計、都市計画、執筆などを行うとともに、新しい視点で全国各地の不動産を発見し紹介する不動産メディア「R不動産」を展開。

TURNフェス3の最終日、打ち上げの会場となった、わずか10坪ほどの小さな中華料理店に集まったアーティストやパフォーマーたちの中に馬場の姿もあった。初めて重度の視覚障害を公表して参加した企画を終えた夜、馬場自身が“見た”光景について、季刊誌『alterna』の連載記事「オルタナティブな空間」の中で語った。

何かが進まないというプロセス

このところ、こども会議がなかなか実施に至らないことへの小さな不安があったのだが、ここに来て、この多少何かが進まないというプロセスも悪くないのかもと思う。こうやって毎回こども食堂にいる中で見つかるここの日常や普通と、もう少し向き合ってみようと感じている。

2017年 4月27日 タイムライン「新しく思うこと」より

永 岡 大 輔

アーティスト。鉛筆の描画をもとにした映像作品の制作や、創造の瞬間を捉える実験的なドローイングを行う。また近年は、「球体の家」をテーマとした作品制作に取り組んでいる。TURNでは「こども会議」との交流をつづける他、「TURN in BIENALSUR」に参加し、ブエノスアイレスで発達障害のある児童らとの交流プログラムを行った。

「こども会議」とは、大田区内で「こども食堂」を主宰する３つの団体によるネットワークの名称で、永岡の交流先。同時に、子供も大人も参加でき、様々なテーマで話し合われるミーティングの企画名でもある。TURN フェス２に向けて「球体の家」について話されたのもこの場だった。TURN の交流プログラムは、こども会議が実施される日もされない日も、どちらも交流プロセスの重要な時間として捉えている。

表現とは私とあなたの関係

様々な立場の人たちと関わるプロジェクトを行うことで、私たちの認識や存在の仕方をどれだけ揺さぶることができるのでしょうか。そしてその価値をいかに未来に問うことができるでしょうか。そのことを、自らが常に権力的であるということを自覚しながら、ただ単に私たちが想像するだけではなくて、協働し、共犯しながら考えていく場は、どういう風にしたら実現できるでしょうか。そういう意味で、表現とは私とあなたの関係そのものであるのではないかと思います。

2017年 11月19日 第３回 TURNミーティングより

長 津 結 一 郎

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門助教。NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事。第３回 TURNミーティングで、TURNを社会包摂の観点から考えた。

長津は、「TURN」という言葉が生まれたきっかけとなった展覧会「TURN／陸から海へ（ひとがはじめからもっている力）」（2014–2015）で事務局を務めつつ、「東京迂回路研究」（2014–2017）を展開。現在は九州に拠点を移し社会包摂と表現についての研究をつづける。新たな相互作用の出現を期待する関係性の概念として「共犯性」を説く長津の、当事者性の高い意識のもとで構築される思考の道筋から、多くの気づきを得た。

しなきゃいけない

活動をしているときはすごく楽しいし、みんな、大西さんのこと大好きだし、すごく喜んでいるんですけど、その場で終わってしまうかなって。やっぱり区立の施設なので、区に説明したり区民に説明したり、理解を得ていただくことも必要になる。見えないプロセスも大切なんだよ、と言われながらも、やっぱり答えを出さないといけない、説明しなきゃいけなかったりする。そういう課題が見えてきていて、今、それを問われています。

2017年 6月11日 第1回 TURNミーティングより

高田紀子

板橋区立小茂根福祉園の生活支援員。初年度から TURN に参加する同施設の担当者として、アーティストの受け入れのみならず、積極的に施設内のアート活動を推進している。

好奇心に支えられる１年目、やりたいことが見つかり意欲が増す２年目、そして３年目を迎え立ち現れてくる継続と発展に対する課題。TURNミーティングに集まった主催者やプロジェクトメンバー（アーティスト、交流先の施設関係者ら）が、高田の言葉に耳を傾けた。

ここから先の深めた関係

今後、施設との交流が深まれば深まるほど、アーティスト自身も施設側も、TURN することが難しくなっていくのかもしれません。良くも悪くも慣れというものは、そうさせます。ですが、逆にここから先の深めた関係性だからこそ気が付ける微細な変化、ささやかな TURN が見つかっていくのかもしれないとも思います。さらにその先に、もっといろんなタイプの人がともにいる、いろいろな TURN のあり方がある多様性に富んだ TURN フェスができあがるのかもしれません。

2017年 3月 7日 メールより

五十嵐靖晃

アーティスト。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然とを美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。TURN には 2015 年度から参加し、クラフト工房 LaMano との交流を行う。また「TURN in BIENALSUR」の一環で、ペルーのリマの通所施設に約２ヶ月間滞在した。

五十嵐は、TURN でもっとも多くの交流プログラムを経験しているアーティストといえるだろう。TURN フェス２が閉幕した後、フェスに参加したプロジェクトメンバーからのフィードバックを受けた際、その経験をとおして今後のアーティストと交流先施設間の関係性の変化や、その先により豊かな可能性があることへの予感を伝えてくれた。

「TURN LAB」（ターンラボ）の必要性を感じていた。ようやく、交流プログラム、TURNフェス、TURN LANDに加えて、TURN LABという活動全体が揃った初回が今日。ラボで言葉を紡ぎ、交流で身体化し、フェスで紹介する、そしてランドで常態化していくという構造をとおして、TURNがより豊かなものに育っていくということを、まさに根をはる形で展開できたらと改めて思いました。

2017年11月19日 第3回TURNミーティングより

森 司

アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長。東京2020公認文化オリンピアードの一つである「TURN」を、プロジェクトディレクターとして牽引する。

第3回TURNミーティングは、James Jackと長津結一郎を交えた研究的要素の強い内容となった。企画の執行に翻弄されがちな現状を立ち止まり、プロジェクトの本質を見つめる時間を持ちたいとの考えから計画されたミーティングで、二人の研究者からの示唆に富む発言を得た。それを受け、閉会の挨拶にかえて、「TURN LAB」の機能が新たに加わることによって更新されたTURNの構造について言及した。

TURN NOTE
「TURN」にふれたときの言葉2017

平成30年3月22日

監修：森司（アーツカウンシル東京 TURNプロジェクトディレクター）

編集：奥山理子（アーツカウンシル東京TURNコーディネーター）

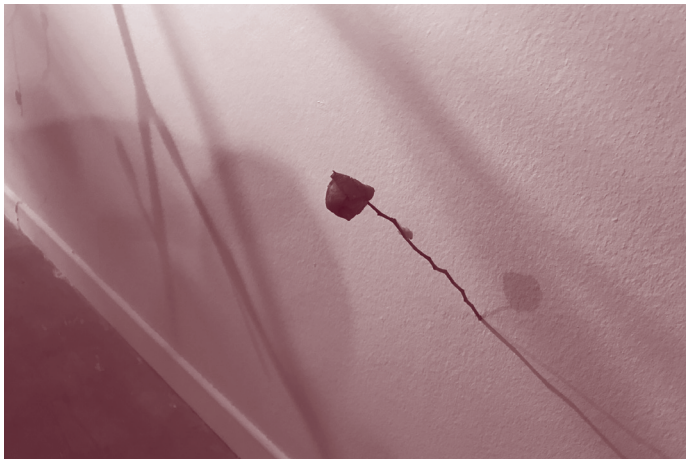
編集協力：アーツカウンシル東京［浅野五月、畑まりあ、山内祥子、山口麻里菜］、
特定非営利活動法人Art's Embrace［天羽絵莉子、岩中可南子、田村悠貴、東濃誠］

デザイン：星野哲也

写真：奥山理子、テンギョウ・クラ、冨田了平

翻訳：株式会社オフィス宮崎

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階
Tel：03-6256-8435／Fax：03-6256-8829
Email：info@turn-project.com
URL：www.artscouncil-tokyo.jp
TURN公式ウェブサイト：http://turn-project.com

©2018 Arts Council Tokyo
Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture
All rights reserved